

望 と 勇

令和7年4月10日

No.2

文責 田中 誠

学校に命が吹き込まれる

校舎いっぱい、子どもたちの声が響いています。

出会いの日、4月4日は、まさに学校に命が吹き込まれたようでした。

入学式のために、会場を整えたり、1年生の配布物を袋に詰めたり、装飾を施したりと、職員全員で準備を進めて参りました。それぞれが自分の分担を全うしつつ、互いにカバーし合いながら入学してくる1年生や、自分が担任したり関わったりする子ども達のことを思い浮かべていたことと思います。

ただ、ちょっと、何か、物足りない。いい雰囲気だったことは間違いないのですが、何か物足りない、そんな感じがしました。それが、「教師が教師として最も輝くために必要なこと」であったと、始業式・入学式当日にはっきりしました。

言うまでもありません。子どもたちの姿です。

校内をきれいに掃除してくれた6年生に、声がけする先生のはつらつとした声。

担任発表の時、自分が担任する学級の子どもたちに向けた笑顔。

式典後の教室で、自己紹介の準備を進める子どもたちを見守る柔らかい眼差し。

ネクタイを外し、シャツの腕をまくり上げ、教室へ向かう足の速さ。

下校する子どもたちを児童玄関で見送る晴れやかな表情。

子どもたちの様子を語り合う時の「プロ」の顔。

子どもたちの姿を目の当たりにした先生方は、前日までの姿に加えてさらにもう一段ギアが上がったようでした。それはまるで、教師としての先生方の体に、命が吹き込まれたかのようです。

やっぱり学校は、子どもたちの生き生きとした姿があって、学校になるんだなと感じました。ただ子どもたちがいるということではなく、そこで起きる楽しいことや嬉しいこと、悲しいことや苦しいこと、そういう「できごと」を子どもたちと職員とで味わったり乗り越えたりしながら、共に生活を作っていく場なのであるな、と。

このお便りで少しでも多くの「できごと」をお伝えできたらと思います。

